

まえがき

この本を書く直接の契機となったものは、慶應義塾大学のアート・センターから、アート・マネジメント講座で画廊経営について話をしてほしいと依頼されたことによる。一九九〇年の開講以来、私はゲスト・スピーカーとして、毎年二回(一回一時間半)講義する機会を得たのである。そのために作成したノートがこの本のベースとなっており、題名もそこに由来する。

また副題はこの本の内容を示している。すなわち私が画廊を経営していく過程でじかにからだて実感したことを項目をあげてとりまとめたものである。

「実感論」という言葉は面白いと私は思っている。感ずることと論ずることとは次元が異なる。感じたことを正確に述べるのはそれ自体困難である。美術批評や音楽批評がむつかしい所以であろう。感じているところをくまなく論ずることは、私の力ではどうも及ばない。しかし、この本で述べているいくつかの問題は論ずるに値する、と私は思っている。問題提起とお考えいただければ幸いである。

ところで、前述のノートの源泉は、拙著『私の画廊—現代美術とともに』(一九八二年刊)および『画廊のしごと』(美術出版社、一九八八年刊)のなかに「わが画廊経営実感論」と題して一章を設けているエッセイである。両者はともに小文であるが、今回の本のおおよその骨格を示している。

『私の画廊』を刊行した当時はまだ美術ブームの前夜であり、私の画廊が京橋から現在の銀座に移転した年である。そして二冊目の『画廊のしごと』は、今から思うと空前の美術ブームの渦中に入った頃に書かれている。

ところが今回の本は、ガラリーと状況が変わった九六年の刊行となった。バベルの塔ならぬバブルの塔が崩壊し、直下型地震ともいべき急激な経済の落ち込みで恐慌状態に陥っている時点で書かれている。同じテーマであっても、環境の変化と筆者の体験が作用して、趣きを異にしていることはいままでのない。また、第三冊目のこの本は「画廊経営実感論」のみで一冊の本として成立している。構成も内容も格段のスケールとなった。

ところで、画廊関係者が美術に関するエッセイを書くのは珍しいことではないが、「画廊経営論」というのは少ないように思われる。では筆者が経営論を書いたのはなぜか?

それは筆者が銀行に二〇年間勤めたことにある。もし私が大学を出てすぐさま美術業界に身を投じていたとするならば、恐らくこの本は生まれなかったであろう。

この二〇年間の経験は大きい。銀行では融資部門がもっとも長かったが、ほかに資産税関係の講師のしごと、業界調査、関係会社への出向等々、得るところが多かった。こうした経験が私の内部にあり、それがこの本の生まれた一因である。

さらに深く、根元に遡れば、私が生来美術が大好きである、というところに行き着く。私の生家は舞鶴市で家具屋を営み、祖父彦蔵は日本画、骨董を好むコレクターであった。

商売は祖母ハツがとりしきり、彦蔵は風流の道に遊んだ。孫の私は、祖父が床の間の掛軸をとり替えるのを手伝った。家はかなり広く、床の間は三カ所あり、季節ごとに掛軸を取り替えるのはひとしごとであった。このことが私の絵画体験の第一歩であった。

コレクターであった祖父の書棚には『日本美術年鑑一九二七』（朝日新聞社編）があり、中学生の頃から私はそれを愛読した。三〇七頁に及ぶクロス装の美しい本で、図版一〇六頁のうちカラーが一六葉収められていた。この美術年鑑こそ、私が最初に手に取った画集であり資料であった。これは今も私の書架に並んでいる。

そして、この実感論を支える根拠は何か？ と問われるならば、私が実際に現代美術を取り扱う画廊を経営しているという事実に至る。この事実が、私の究極の拠り所である。

以上をまとめると、まず縦軸に現代美術があり、横軸に画廊経営がある。そこに時間軸が加わり、球形の全体像が形成されているとあってよい。もっともこの三つの要素がバランスよく成長しているわけではなく、かなりいびつであることは十分承知している。この歪んだ気球を何とか操縦している過程で、この本は生まれたのである。

佐谷和彦